HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌの人々への差別の実像 : 生活史に刻まれた差別の実態
Author(s)	菊地, 千夏
Description	第7章
Relation	現代アイヌの生活の歩みと意識の変容 : 2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書. 小山透編著
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, その2, 143-156
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48978
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep02_009.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第７章　アイヌの人々への差別の実像
――生活史に刻まれた差別の実態――

菊地　千夏
北海道大学大学院教育学研究院専門研究員

はじめに

和人によるアイヌへの差別に関しては、従来の数多くの調査研究や報告書の中で触れられてきた。行政主体の調査においてさえも、たとえば北海道庁による「ウタリ生活実態調査」の場合、1986（昭和61）年の第３回調査から差別に関する項目が付け加えられた（小笠原 2004:192）。だが、おびただしい数のアイヌの社会や文化に関する研究があるにもかかわらず、かれらの労働・教育・生活等の実態が十分に明らかにされているとはいえない（小内 2010:1-2）。これは差別の実態に関しても同様であり、実際にかれらの生活のどの場面に、どのような内容の差別があるのかは十分に検討されてこなかった。

そこで本章では、アイヌの人々が語る差別の内実に向き合い、かれらの生活史に刻まれた差別のリアリティを描き出してみたい。

以下では、まず第１節にて、アイヌ民族である男女、それぞれ１人の生活史を概観する。そしてそこに挙げられる差別の内容を参照しながら、ライフコース上のどの場面で差別が生じやすいのかを明らかにしていく。

第１節　差別の記憶

第１項　札幌在住女性Ａ（老年層）の場合

Ａは、戦前、静内町にて、アイヌの血筋の両親のもとに生まれた。

幼少の頃、父親はアイヌの伝統を大切にし、親の命日になるとカムイノミをしていた。アイヌである母方祖母は口を染め、盲目ながらいつもござ編みをしていた。当時、家の周りはほとんどがアイヌという集落に住んでいたが、隣りの家には和人が住んでいた。Ａは小学生の頃、その家にうまれた赤ちゃんの子守りを任されていた時期がある。数少ない和人の家族とも、分け隔てなく近所付き合いをしていた。

しかし小学校では、和人からの差別（いじめ）があった。アイヌの家庭は総じて貧しく、お弁当を持参できなかったり、学校に行ってもいじめられたりするため、学校に行けない（行かない）子が当時は多かった。そうすると、必然的にクラスの中にアイヌの割合が少なくなるため、「お前、アイヌだろう」と同級生から言われることがあった。また、Ａは毛深いのをからかわれるので素足になれず、夏には暑くてもズボンで我慢した。とくに男の子からいじめられることが多く、辛いことがあっても誰にも打ち明けられなかったので、小学校生活は暗かった。また、走るのが早くても選手には選ばれないなど、教師からの差別的な扱いもあった。

だが中学に入ると状況は一変し、教師はとても良い人で差別がなかった。小学校でのいじめを経て、Ａは引っ込み思案になりがちであったが、中学の教師は「答えが分かるのだったらちゃん

と発言しなさい」と、Aに発表させてくれた。今でもこの教師とは年賀状のやり取りをしている。

世間ではアイヌ差別の問題が多かったので、高校に進学したからといって就職できるとは思わなかった。そこで中学卒業後は、学校の紹介で薄皮（注・包装用の経木）の製造工場に就職した。ところがその工場は一カ月で倒産してしまい、実家に舞い戻ることとなる。実家では兄や姉と一緒に農業を行った。

とはいえ、すでに妻子のいる兄らと一緒に住み続けるわけにもいかず、その後、旅館で６カ月働いた。その時、結婚を考える人との出会いがあったものの、自分が毛深いことを考えたらついて行く気になれず､結婚をあきらめた。体毛が気にならなかったらついて行ったのにと思うと悔しい。

６カ月働いて失業保険をもらった後は静内に戻り、知人の紹介によって営林署で働いた。そしてこの職場で出会った男性と、20代前半に結婚した。結婚の際には夫に「私アイヌだけどいい？」と尋ねたら、「いいんじゃない」との返答だったので、とくに苦労することはなかった。夫の家族もアイヌとの結婚を反対するようなことはなかった。

結婚してから３年後に長女が生まれ、翌年には夫が営林署を退職して札幌に引っ越した。30代前半には長男も誕生し、二児の母親となる。札幌に来てしばらく経った頃、静内でウタリ協会の支部長をしていた兄から子どもの奨学資金等の援助があると教えられ、勧められてウタリ協会に入会した。

子育てが落ち着いてくると、Aは造園関係の販売の仕事を始めた。家を建てるために夫婦共働きで頑張っていたつもりだったが、Aが40代前半の時、夫の浮気が発覚し別居することとなった。以後20年別居を続け、60代になってから正式に離婚の手続きをした。

夫が家を出てから実質ひとり親となったので、40代後半からは昼間はスーパーでパンの販売をする仕事に就き、夜はスナックで働き始めた。それまではアイヌだからということを意識すると、人の中に入るのが嫌だった。だが昼間の仕事は大きな声を出さないと品物が売れないので、そんなことは考えていられない。大手スーパーに入り、10年以上販売の仕事を続けた。そのうち、アイヌという意識がまったくなくなり、自分にもできるのだと自信がわいてきた。実際にAの父方祖母と母方祖父は和人だったので、自分はアイヌの血がそれほど濃いわけではないと考えることが自信につながった。

夜のスナックでは「お前、アイヌだろう」と言われたけれど、「アイヌで何が悪いの？」という感じで平気で言い返せた。子ども二人を育てるために、お金が入る仕事は何でもしなければならなかった。なお、子どもたち二人は高校進学の際にウタリ対策の奨学資金を利用した。

二つの仕事を続け、60代前半に脳溢血で倒れてしまった。医者からはもう無理な仕事はできないと言われている。現在は、病院代がかかるので年金だけでは生活できず、生活保護を合わせて年間120万円ほどで暮らしている。体調を悪くしてからしばらくアイヌ関係の集まりは休んでいるが、「家にばかりいないで出てきなさい」と声をかけてくれる友人もいる。

以上、Aの生活史を概観した。

彼女は小学校時代に差別（いじめ）を受けたが、中学校では環境に恵まれていた。小学校では体毛が濃いことをからかわれ､そのコンプレックスは結婚をあきらめることにもつながった。ただし、仕事に就いてからは「お前、アイヌだろう」と言われても、物おじせずに「アイヌで何が悪いの？」

と言い返せるように変化している。

このように、何を差別ととらえるかはその人の考え方次第であり、同じ個人の中でもその受け止め方が変わり得る。そのため、100 人いれば 100 通りの差別の体験談がうまれることになる。なお、Ａの生活史が典型的な事例とは言い切れないが、アイヌの対象者 95 人のうち、これまでの人生においてずっと差別を受け続けてきたという人は存在しなかった。

だが、学校でのいじめや差別は大多数から聞かれた事例である。その内容としては、体毛の濃さをはじめとした見た目に対する差別や、「アイヌ、アイヌ」という言葉自体が差別語として横行している状況に注目する必要があろう。さらにＡの事例から、社会に出てからも職場や地域生活の場でアイヌであることを指摘される様子がうかがえる。

第２項　むかわ在住男性Ｂ（壮年層）の場合

ではもう一人、アイヌ男性の生活史を紹介しよう。

Ｂは戦後の高度成長期に生まれ、現在、家族５人で暮らしている。

Ｂは父親がアイヌ、母親は和人という家庭に、５人きょうだいの三男、末っ子として生まれた。父親は鵡川町で漁業を営んでいた。父親の実家はもともと農家だったが、たくさんのきょうだいがいる中で三男坊だったため、戦争から復員した際、土地をもらうことができなかった。そこですぐに食べられる職業を求め、漁業組合に申請して漁師になったという。そういう経緯でＢの父親が漁業の一代目、Ｂは二代目である。

小さな頃、家庭の中でアイヌの伝統的なことと言えば、じゃがいもを凍らせて粉にして蒸した料理と、アカハラという魚の内臓だけを使った料理を食べたのを覚えている。他にはとくにアイヌの伝統的な生活様式は体験したことがない。父親からはアイヌだと教えられたこともなく、父親は自分のアイヌの血を嫌がっていたようだ。当時はどちらかと言えば、アイヌの儀式などはテレビで見る世界だった。

鵡川には７つの小学校があったが、Ｂは市街にある小学校に通った。アイヌの子どもはそれほど多くなく、Ｂに対する和人からのいじめはなかった。高学年の時、Ｂが住んでいた地域は、苫小牧東部開発計画のため、国から漁禁止令が出て漁業ができなくなってしまった。そこで漁業を続けるのなら○○に移住するよう言われ、中学校に上がる前から少しずつ○○地区に移住を始めた。

中学校に入学した頃、最初は春と秋だけ○○地区で、夏と冬は元の地区で漁をしていた。そしてＢが中学２年生の時に正式にそこに移住した。○○では、小屋をちょっと住めるようにした貸家に住んでいたので、周りの子どもたちの一部から「あんなところに住んで」と言われたけれど、元の場所に行けば立派な持ち家があるので全然気にならなかった。

中学時代の同級生には、純粋なアイヌの血筋の子が 10 人くらいいた。見た目から蔑称されたり、蔑視されたりしていた。そういう人たちは平均的に見て生活が苦しかったようで、勉強時間も少ないため成績が良くない。勉強ができないし、運動もできない、アイヌで見た目が良くないなど、いろいろあっていじめられている子はいた。純粋なアイヌで一人だけとてもよく勉強ができる子がいて、その人だけはアイヌでも馬鹿にされたりはしていなかった。いじめられていた子の多くは高校へ行かないで中学を卒業してすぐに集団就職した。

一方、Ｂは普通高校に進学し、卒業後は１年間、漁業関係の専修学校に通った。全寮制だったので、

１年間は学校のある市に住んだ。

卒業後、鵡川町に戻ってきた。兄たちは家を出て、長姉しか家にいなかった。誰かが家の面倒を見なければならなかったため、Ｂは魚を触るのも大嫌いだったが、後を継ぐことになり漁業を始めた。

20代後半に、友達を介して知り合った和人の女性と結婚した。その際、Ｂがアイヌであることで妻の母親に反対されて苦労した。妻の母親からはＢに直接ではなく、妻が言われていた。妻の出身は登別だったので、登別や白老にはアイヌがたくさん住んでいて、アイヌの人たちをたくさん見ていたために、妻の母親には自分の娘がそういう人の子どもを産むということに抵抗があったのかもしれない。反対されている時期は漁師仲間の幼馴染によく話を聞いてもらった。

ただし、妻の母親とは対照的に父親は「娘が好きならばそれで良い」という態度だったので、問題は自然に解決されていって結婚するに至った。その当時、Ｂは他人より何でもできると思っていたし、容姿も悪くないし、遊んでいるわけでもなかったので、アイヌであるために結婚を反対されるとは考えたこともなかった。だから反対された時は「何がいけないの？」と思い、びっくりしたし強烈だった。その時初めてアイヌであることを意識した。

Ｂは子どもができた時、ウタリ協会には教育支援があるので協会に入ろうと思っていたが、アイヌの血を嫌がっていた父親に激しく反対された。しかし結局はそれを押し切ってウタリ協会に入り、子どもたちの色々な支援を受けているので、とても助けになっている。

Ｂは実家の後を継いで、漁業を始めて30年になる。長男が三代目としてＢの後を継ぐことになっている。

Ｂの生活史においては、先のＡと比較すると学生時代や職場での差別経験がほとんどない。むしろＢは学校でいじめられていたアイヌの子を「勉強ができない、運動もできない、アイヌで見た目が良くない」と客観的に捉えている。このように、アイヌの人々自身がどのような差別観を持っているのかを検討していく必要もあるだろう。

そしてこうした差別観は、生育環境や親の態度とも関係していると考えられる。たとえば、Ｂの父親は自らのアイヌの血筋を嫌がっていた。それゆえＢは父親からアイヌであることの告知を受けずに育ち、アイヌに関しては一切話さなかったという。以下ではこうした親子間や世代間の比較も行い、差別を把握する一助としたい。

Ｂがアイヌであることを意識するきっかけとなったのは、和人である妻との結婚を反対された時であった。結婚に関しては、アイヌの血筋が疎まれたり、アイヌの血を薄める戦略として和人との結婚が望まれたりするケースがあるので、注目すべきライフイベントである。

以上の男女二人の生活史で確認できたように、ライフコース上では「学校生活において」、「就職の際や職場において」、そして「結婚に際して」差別やいじめが起きやすいといえよう。以下ではおもにこの三つの場面を事例としながら、差別の内容やアイヌの人々が持つ差別観に注目していく。その際、地域差、男女の性差、世代の差を視点として差別の特質を掘り下げてみたい。

第２節　差別にみる地域差

はじめに、和人によるアイヌへの差別やいじめにはどのような地域差がみられるだろうか。以

下では札幌市とむかわ町の事例の比較を行い、さらに両地域以外での居住経験をもつ人々の語りにも注目する。

第１項　いじめの形態

札幌市とむかわ町の地域差に関して、本調査のデータ数では差別の発生頻度の違いにまで言及することはできないが、両地域におけるいじめの形態には特徴的な点がある。

最初にむかわでは、札幌と比べて地域や学校の中にアイヌの子どもが一定数いることも少なくないことから、アイヌと和人との集団対集団の対立やいじめがみられることがある。

Ｃ（男性・むかわ・壮年）は小学生の頃、和人の子どもたちとは仲が良くなかった。敵対心みたいなものをもっており、アイヌと和人のグループが地区で分かれていた。アイヌは○○（注・地区名）、和人は川を一つ挟んだ向かい側の○○（注・地区名）に住んでいた。クラスでは35、6人中、半数ぐらいがアイヌで、和人の一部が集団になってアイヌをいじめると、アイヌも団体になってやり返していたという。さらに教師からもアイヌへの差別があり、ある時、教師の家に泥棒が入るという事件が起きた際には、証拠もないのにアイヌの子どもたち６人が疑われ、廊下に一日中立たされた。そのように頭から決めつけられたので、教師すべてが敵となり信頼もなくなってしまう。こうした集団対集団のいさかいの経験を持つのは、アイヌ部落のあったむかわ在住者にのみ見られる事例である。

これに対して、札幌市でもいじめがないわけではない。

Ｄ（女性・札幌・壮年）は中学２年生になるまでむかわに住んでいた。むかわで過ごした小学時代には、「コタンに住んでいる」「アイヌだ」などといじめられ、石をぶつけられることもあった。そして中学２年生で札幌に転校し、中学校では自分から友達にアイヌだと言ったことはなかったものの、「普通の人と顔立ちが違う、他の子より毛深い」などと言われるようになった。「アイヌの血筋なの？」と聞かれ、「アイヌだったら友達にならないの？」と問い返したことがある。友達は「そんなことはない」と言っても、結局、授業でアイヌのことが出たときに一緒になって馬鹿にして笑っていたという。

以上のように札幌の場合、クラスの中にアイヌの子どもがごく少数となるため、むしろいじめのターゲットにはなりやすい側面がある。実際に、むかわよりも札幌在住でのほうが学校での個人的ないじめのエピソードが目立った。

第２項　いじめの言葉

どちらの地域でも、和人からの「アイヌ、アイヌ」といったはやし立ては、いじめの典型的な言葉として用いられてきた。自分に向けられた場合もそうでない場合も、学校生活の中で多くの人々が耳にしたようである。

Ｅ（男性・むかわ・老年）は小学校に入学してすぐに「アイヌ」と指をさされてバカにされたり、「あ、イヌ来た」と言われて「あ、犬が来たのかな」と思ったら「アイヌ（が）来た」と言っていたことが分かったりして、自分自身をアイヌだと意識したという。

この「あ、犬」＝「アイヌ」という言葉は、札幌よりもむかわに住む人々から多く聞かれた。むかわにはアイヌ集落があるため、アイヌと和人の対立構造が親や祖父母世代から根付き、いじめ

に使う言葉も豊富になっていると思われる。他にも、「ハイッタ（ばか）」、「魚臭い」、「アイヌねぎ」というふうに多様に挙げられる。

むかわの40代以上の世代からは、小さな頃に「イポカシ（醜い）」、「エパタイ（ばか）」といったアイヌ語を祖父母から日常的に聞かされていた（言われていた）という語りもあった（F、G、H）。こうしたアイヌの差別的な言葉を上の世代から受け継ぐのも、むかわのようなアイヌ集落のある地域に特徴的である。

一方、札幌在住者のいじめの状況に注目すると、授業を通じて「アイヌ」の知識を得た子どもが「アイヌ」をいじめのターゲットにしていく様子が見て取れる。

Ｉ（男性・札幌・青年）は札幌の中学に入学してすぐの頃、社会科の授業で家系図を作ることがあった。そこで、曾祖父の名前がアイヌの名前だったので、両親に聞いて初めて自分がアイヌだということが分かった。そしてその授業以来、アイヌであることをからかわれたり、いじめられたりするようになった。中学校１年の終わり頃には殴る、蹴るなどの暴力を受け、お金を巻き上げられたこともあった。結果的に先生に伝わり、いじめた側の３人は注意を受けていた。

こうして授業を通じて差別が起こる様子は、札幌以外の地域でも見られる。Ｊ（男性・札幌・青年）は小学生の頃は白老町に住んでいた。白老では１クラス38人のうちアイヌが１、２人程度だったので、同級生のアイヌの友達とはよく遊んでいたし、和人の友達とも普通に付き合っていた。しかし、小学３、４年生になると悪ふざけのようないじめが始まり、社会科の授業中に「アイヌ＝縄文時代の人」、「お前が（教科書に）出てきた」などと言われた。髭のもじゃもじゃした写真を見て「不潔だ」とからかわれたこともある。子どもだから思ったことを素直に言っただけのことだと思うが、Ｊは小さいながらに傷ついた部分もあった。

以上のように、家系図を作ることや授業で習った言葉（具体的には「縄文時代」、「北京原人」、「シャクシャイン」など）が引き金となりいじめられたという話は、札幌を始めその他の地域でも散見された。

さらに上記のエピソードには、授業をきっかけに自分の血筋を知ったり、「アイヌ、アイヌ」と言われることでアイヌとしてのアイデンティティを形成したりする様子も見て取れる。その意味で、アイヌの人々にとって差別的なことも含む学校での経験が、その後の人生に無視できないほどの影響を与えている可能性がある。

第３項　地域移動と差別観

最後に、道外での生活経験をもつＫの差別観に注目してみよう。

Ｋ（男性・札幌・青年）は父親が和人、母親がアイヌという血筋である。札幌での小中学校時代は、アイヌではない子どもが圧倒的に多く、肌の色の違いや、体毛の濃さなどでいじめられたことがあった。アイヌであることは小学生の頃に、妹とともに親から教えられたので知っていた。

高校卒業後、札幌市内の専門学校に進み、20代前半に就職で関東へ移り住んだ。そこでは、東京などで行われるアイヌの活動にいろいろ参加していた。その活動には友達からメンバーに入らないかと誘いがあった。その友達はもともと北海道に住んでいたが、差別が嫌で東京に移り住んだ。その頃から、踊りを踊っている時やアイヌ語を習っている時に自分はアイヌだと自覚するようになった気がする。そのアイヌのイベントに参加した時は楽しかった。

だがその後、札幌に帰ってくると、差別が怖くて活動できなくなった。札幌でも踊りをする機会はあるものの、参加したことはない。現在、札幌では自身がアイヌであることを周りに話してはいない。知られるのが怖くて積極的に動けない。これまでとくにアイヌであることによって札幌で嫌な思いをしたことはないが、何となくそういう気持ちになるという。

Ｋの事例から、道外では差別を意識せずにアイヌであることを表現できたにもかかわらず、逆に道内ではアイヌ差別を意識して萎縮してしまう様子がうかがえる。

他にも、たとえばＬは父親が朝鮮人、母親がアイヌという家系だが、仕事の関係で関東で過ごしていた時期は、アイヌであることをまったく意識もしなかったし、ウタリ協会の活動もまったく伝わってこなかったという。周りでもアイヌについて話題になることはなかった。お風呂に入ると自分自身で毛深いことが気になってはいたが、誰からも何も言われることはなかった。

このように、「アイヌ」ということへの認識がない地域では、アイヌ差別は起きにくいことがわかる。和人からのアイヌ差別は北海道の中で、アイヌの知識を学んだり、アイヌのことを少しでも知っている世代から伝え聞いたりすることで、「差別」として成立しやすいということになろう。

第３節　差別にみる性差と血の濃さ

次に、容姿にまつわる差別の事例を参照しながら、性差やアイヌの血の濃さによる差別の程度を把握したい。

アイヌ民族の容姿に関しては、顔の彫りが深いことや、四肢が発達しているなどの身体的特徴が言われることもあるが、何よりもまず、体毛が濃いことに対する差別が数多く存在する。

第１項　女性にとっての体毛の問題

Ｍ（女性・札幌・壮年）は子どもの頃からずっと体毛の濃さを指摘されてきた。小学校に入学してすぐ、１年生の時に下着１枚で健康診断を受けた。その時に周りの子から、「どうしてあなただけ足におひげが生えているの？」と言われた。それまでは考えたことがなかったが、周りを見たら足に毛が生えている人はいなくて、「ああ、私は他人とは違うんだ」ということを意識した。母親はアイヌだったが体毛は薄いほうだったので、Ｍの悩みには鈍感だった。中学校でも「マンモス、毛もじゃ」とのあだ名をつけられ悲しい思いをし、中卒後、紡績工場で寮生活を送った際にも、共同風呂で毛深いのを言われることがあった。「剃ったほうがいいんじゃないの？」と言われることが嫌だった。

Ｎ（女性・札幌・老年）が自分をアイヌだと自覚するようになったのは、異性とお付き合いするようになってからである。同じ年代の男性と遊びに行った際、ちょっと手を触ったら男の人に「痛い」と言われた。自分が毛深いから言われたのだと気付き、毛深いのは嫌だと思った。アイヌである自分の父親も毛深かったし、アイヌにはこういう特徴があるのだと悟った。アイヌって何だろう、どこが悪いのだろうとも思った。それまでいじめられた経験もあったので、このときに男の人が怖いという気持ちが芽生えた。

Ｏ（女性・むかわ・壮年）は、もともとは和人と結婚したいと思っていたので、アイヌである夫と結婚する際には悩んだ。自分が産む子どものことを考えると、アイヌの血が入っていることは問題ないけれど、毛深くなることが気になるので、そのことで子どもには悩んでほしくなかった。

夫は小さい頃から毛深いことがコンプレックスだったらしい。女性は毛を剃って処理できるけど男性はできないので、コンプレックスが強く、夫はトラウマを持っているように思う。実際に娘３人は体毛が濃い。しかしまだアイヌであることの告知はしていないので、ネガティブにとらえないよう配慮したいと考えている。

このように、体毛の濃さの悩みは男女とも見出すことができる。しかし、それは男性よりも女性にとって切実で、かつデリケートな問題である。女性の中で体毛の濃さを気にしないという人は皆無といってよい。思春期あたりから悩み始め、その後はもう仕方ないと諦めたという声も多くあった。

第２項　朝鮮アイヌへの差別

ところで、体毛を要因とした差別とかかわって、アイヌ民族の中でも朝鮮人とアイヌのハーフであることは純粋なアイヌであること以上に差別を受けていることがある。

Ｐ（男性・むかわ・壮年）の母親は朝鮮人とアイヌとのハーフ、父親がアイヌであるので、Ｐには朝鮮人の血が四分の一入っている。母親は昔、「朝鮮アイヌ」と馬鹿にされたことがあり、あまりアイヌを好んでいなかった。アイヌは体毛が濃いが朝鮮人は薄いので、Ｐも毛がないことをアイヌからバカにされたことがあるという。

Ｐの場合は、アイヌの男性であるにもかかわらず、朝鮮人との混血で逆に体毛が薄いので、アイヌ民族内で差別されていたことがわかる[1)]。

Ｑ（男性・札幌・老年）は母親がアイヌ、父親が朝鮮人というハーフである。Ｑが生まれた頃、昭和一ケタ代の日本の環境としては、日本人のアイヌに対する差別が激しく、アイヌの女性は朝鮮人と結婚するしかなかったという。お互いに苦しい者同士が結婚したという事実がある。

Ｑは小さい頃から「朝鮮アイヌ、湯気あがった」と馬鹿にされてきた。自分自身をアイヌの一人だと自覚したのは、結婚する時に「アイヌ、朝鮮人、一番の貧乏」と妻の父親から言われた時である。実際に就いていた仕事の給料は安く、そうした経済的な不平等からまず第一の差別が生まれ、その上に、「人種差別」（あるいは「民族差別」）がある。こうして差別が二重三重となり、アイヌ差別に朝鮮人への差別も加わるともっとひどくなってしまう。

以上のように、アイヌの中でもさらに朝鮮系の混血に対して差別がなされてきた。Ｑが述べるように、アイヌ女性にとって、日本人との結婚にはハードルがあり、朝鮮人と結婚するしかなかったという事実には、かつて、アイヌ女性への性差別が今よりも強かった時代があったことを確認できる。

第３項　結婚をめぐる女性差別

では具体的に、結婚や出産をめぐるアイヌ女性への差別はどういったものだろうか。

Ｒ（女性・札幌・老年）は10代後半に、５歳年上の建設会社勤務の和人と結婚した。長男が生まれた時、姑が病院に来て、「うちの孫ではない」と否定された。夫にも「俺の子ではない」「子どもは産むな」「子どもはいらない」と言われた。Ｒの心は冷えてしまったが、結局３人の子どもを産み、３人目が生まれた20代後半に離婚する決意をした。９年間夫婦生活を営み、家も建てていたが、全部捨てることにしたという。

このようにＲは結婚相手の和人男性のみならず、その家族からも否定的なまなざしを向けられるという差別的な経験をした。

他方、アイヌ男性の側から、結婚するなら和人としたいという結婚観が語られることもある。

Ｓ（男性・むかわ・壮年）は両親がアイヌの血筋である。幼少の頃から、家族とはあまりアイヌについて話さずに育ち、小さい時から漠然と和人と結婚したいと思っていた。実際に結婚する時に民族性は意識しなかったが、和人の女性と結婚した。

Ｔ（男性・札幌・壮年）は父親がアイヌ、母親は和人というアイヌの血筋である。学生時代に差別はなかったにもかかわらず、就職してから職場で、「アイヌだろう？」と言ってくる人がおり、その人だけは嫌いだった。地元にいるとＴは毛が薄いほうなので「薄くていいな」と言われ、都会に出ると今でもたまに「アイヌ？」「そっち系？」と言われることがある。聞いてくる人には悪気はないのだろうが、良い気分はしない。Ｔは恋愛や結婚に関して、アイヌの相手は遠慮したいという気持ちがあった。生まれてくる子どものことを考えると、少しでも血が薄くなったほうがいい。相手がアイヌだったら恋愛対象にならないと思うのは失礼だが、正直、和人のほうがいいと思っていた。結局和人の女性と結婚しているが、もし妻がアイヌだったら結婚しなかったと思う。今後も極力アイヌであることは知られずに生活したいと思っている。

以上のように、結婚において和人からアイヌが避けられるというのではなく、アイヌ同士の結婚もなるべく避けようとする考え方が見受けられる。本データにおいては、アイヌの男性側がアイヌ女性ではなく和人の女性と結婚したがる傾向が強かった。

第４節　世代間のギャップと差別観

さらに、差別観は世代によっても異なると考えるのが自然であろう。この点を検討するため、まず、親子三世代の違いを把握できるＵのエピソードを参照しよう。

Ｕ（男性･むかわ･老年）はアイヌの血筋であり、同じくアイヌの妻との間に３人の子どもがいる。Ｕは子どもの頃から自分がアイヌであるという意識があり、国民学校時代、「あー、犬来た」と言われ、先生からも差別的に扱われた。Ｕの年代では差別は激しかった。

長男が和人と恋愛の末結婚した時、向こうの親にアイヌだから結婚式をあげないでほしいと言われた。長男の妻になる娘が子どもを妊娠し、本人たちはどうしても一緒になりたいと言うので、Ｕは男性側の親として娘さんをもらいに三回ほど足を運んだ。それだけ言うなら仕方ないということで、結婚式は一切してはならないという条件で、籍を入れることだけを許された。

最近、長男の息子（Ｕの孫）が和人と結婚した。このときには向こうの親が、「本人が真面目なら血統のことは言いません」と約束してくれた。Ｕは涙を流して、「ありがとうございます」と言った。結婚式もあげることができた。

Ｕの事例から大まかに言うならば、現在のおよそ60代以上は、世間でのアイヌ差別が当然のように横行していた世代であり、その子世代（40～50代）でもまだ、結婚差別などのアイヌへの偏見は残存しているといえる。しかしその孫世代（20～30代）に至ると、アイヌへの差別的なまなざしは影を潜めつつあるように思われる。以下ではそれぞれの世代に焦点を当て、差別観がどのように変化しているのか検討してみたい。

第１項　アイヌであることへの誇り

まず青年層の２人のエピソードを概観しよう。

一人目の例として、Ｖ（女性・むかわ・青年）を取り上げよう。Ｖは実家で母と兄、姉と同居している。母方の家系はみんなアイヌの血筋で、父親は和人である。アイヌである祖母は家のすぐ近くで別居している。

小学校の全校生徒は80数人で、同学年の12人中アイヌは４人だった。けんかをした時はアイヌと馬鹿にされたこともあったが、普段はアイヌも和人もみんな仲が良かった。中学校では、アイヌであることをむしろ「すごいね」と言われ、いじめはなかった。

Ｖの曾祖母は口や手に入れ墨をしていたと聞いていたことがあり、裏に住んでいる祖母が、タマサイ（玉飾り）を大事にしているのを見たことがある。それは代々受け継がれたものらしく、祖母は「(自分が）死んだらあげるからね」と話している。

Ｖの母親は、「アイヌ文化は捨てなさい」と言われていた世代で、差別の激しい時期に育てられていたので、自分よりもアイヌ文化について詳しくない。そのため、母親からアイヌに関することを教わったことはないという。

続いて二人目の例として、W（女性･札幌･青年）を取り上げる。Wは現在専門学校に通っており、札幌市で一人暮らしをしている。母は和人、父親がアイヌの血筋である。中学校の時は平取町に住み、全校生徒60人中、アイヌが20人程度いた。学校内では「アイヌ」という言葉が差別語となり、アイヌの友達が言われていたこともあった。だが深刻ないじめというわけではなく、みんな仲が良く、その上でのからかいのような感じであった。

高校卒業後、関西の短期大学に通った。札幌から関西に行く時、父親から「関西は差別が厳しいところだから、向こうではアイヌって言うな」と言われた。これを聞いた時、Wは「本当にそうなのかな」と疑問に思った。そして実際に、短大時代の友達にはアイヌであることを公言し、それによって嫌な思いをしたことはまったくなかった。今でも短大時代の友達とは交流がある。

自分がアイヌ民族であることについて、Wは先住民族の血が入っていて「ちょっとかっこいいかな」と思っている。アイヌは和人よりも少数であるため、自慢かなとも話している。平凡な人生はつまらないと感じており、できることならば、自分がアイヌ民族であることをどんどん売り込みたいと考えている。

以上のように、一人目のＶは母親の世代を飛び越えて、祖母からアイヌ文化を継承されていることがわかった。また、二人目のWは、父親からの差別の憂慮を真に受けずに、アイヌである自分をむしろ誇りに思っていた。彼女たちからは、学生時代にちょっとした差別を受けていてもそれを気にする様子はほとんどうかがえない。つまり、アイヌとして積極的に生きているために、差別の問題は、たとえ上の世代から聞くことがあっても自分たちの問題としては浮上してこないのである。

第２項　アイヌであることを意識しない

上記に加えて、比較的若い世代ではアイヌであることを告知すらされてこなかったというケースもある。

Ｘ（女性・むかわ・青年）は２人の子どもをもつシングルマザーである。Ｘは父親が和人、母

親がアイヌという血筋で、離婚した元夫は和人である。

自分がアイヌであると自覚したのは小学校低学年のことだったと思う。しかし、母親はアイヌであることは隠していて、それについて一切言わなかった。母方がアイヌであることを父親が知っていたのかどうかもわからない。

結婚する時にも、民族性については考慮することなくすんなりと結婚した。元夫にはアイヌであることは伝えていない。夫に伝えなかったのはＸがアイヌ文化に接しておらず、アイヌであることの意識もあまりしてこなかったからで、とくに伝えたくない理由があったわけではない。

現在でも、Ｘはアイヌ民族の一人であると感じることはとくにない。母親からは一切アイヌの話はされなかったので、自分の娘や息子にも告知はしないつもりだった。ただ最近、パートの知り合いが、ウタリ対策の援助を受けられるので、ウタリ協会に入会することを勧めてくれた。それをきっかけに、その当時中学生だった子どもたちにアイヌであることを話したところ、「そーなんだ」みたいな反応が返ってきた。

Ｘのようにアイヌであることを告知されないまま、学校や結婚においてもとくに苦労しなかった場合、アイヌ差別からも距離をとって生きてきたことになる。

同じようにアイヌの母親と和人の父親をもつＹ（女性・札幌・青年）の場合も、家族の中でアイヌの話をする機会はまったくなかった。そして21歳の時、バイト先で「お前はアイヌか？」と聞かれ、そのとき初めて「アイヌ」という言葉を聞き、何のことか理解できなかった。そこで自分で本屋に行きアイヌのことを調べたところ、本に載っている写真の人の顔がみんなＹの親戚とよく似ていて驚いた。それで確信を得て、母親にアイヌであるのかどうかを聞くと、「そうだよ」と返ってきたという。

Ｙ自身もそうであったが、若い人は「アイヌって何？」「アイヌって（今も）生きているの？」というふうにアイヌについて無知である。だからＹは、自分がアイヌであることも今後公言することはないと考えている。

以上のように、アイヌであることを意識していなかったり、アイヌに関して無知であったりする場合は、差別を認知する土俵にも立っていないという可能性がある。こうした状況をふまえ、Ｙは「知ることによって差別が起きる可能性があり、逆に知らないことで差別が起きないこともある」という差別観を持っている。

先の第２節第２項でもみたように、授業を通じ、アイヌに関する知識を得たがゆえに差別（いじめ）が起きてしまうという状況を防ぐためには、アイヌ政策のうち、学校教育の中にアイヌ民族のことを盛り込むことについては、その方法等の点で注意が必要になるだろう。

第３項　差別のトラウマとアイヌのアイデンティティ

続いて、上の世代の差別観についても改めて確認しておこう。

これまで数々の差別のエピソードを確認する中で、和人からのアイヌ差別はたしかに存在し、実際には上の世代になればなるほど辛い経験をしているように思われる。

たとえばＺ（男性・むかわ・老年）は、和人からのアイヌ差別を「虐待」という言葉で表現する。

Ｚは両親がアイヌで、Ｚを含めて５代前までアイヌである。顔もずばりアイヌ顔なので、アイヌとしての自覚は常に持っているし、自分がアイヌでないと言っても誰も信用しない。

中学生の頃、１、２年はむかわ町にある中学校に通った。ここは昔の土人学校であった。しかし３年になって町の中学校に移ると、そこでは和人からいじめられた。学校に行っても軽蔑されたし、虐待された。最初は１対１だったが、やり返すと大勢で来るようになった。言葉ではなく暴力、叩き合いだった。アイヌは同級生で３、４人と少なく、どう足掻いても勝てるわけがない。当時、アイヌの家庭は貧しかったので、親も子どもを労働力にすることばかり考えていた。そういうわけで、学校に行って虐待されたり馬鹿にされたりするよりは、かえって家にいて仕事をしているほうが良かった。

Ｚによれば、Ｚより７、８歳下くらいまでは以上のようなアイヌ差別を経験しているのではないかということである。

そしてこうした差別の経験が、心の傷となって深く残っている人もいる。

Ｎ（女性・札幌・老年）は小学校の時、お遊戯では自分だけ手をつないでもらえないなどのいじめを受けた。その後、大人になってから小学校の同窓会に出席し、当時を思い出して泣いてしまったことがある。かつてＮをいじめた人たちから「なんで泣いているの」と聞かれ、「昔いじめたでしょ」と答えたら、「そんなの覚えてない」と言われた。このように、いじめた側によって記憶に残らないようなことでも、いじめられた側にとってはひどくトラウマになって残ってしまうこともあるのである。

とはいえ、α（女性・札幌・老年）のように、小学生の頃にランドセルを切られるなどのいじめを受け、「いじめられた記憶しかな」く、若い時はアイヌであることを指摘されると縮こまっていたものの、人生を振り返り、年齢とともに強くなったと自分自身の変化を語る人もいる。

また、β（女性・札幌・老年）も、昔は「アイヌだ」と言われると腹が立ったけど、今は「アイヌではないでしょ」と言われると、「いや、アイヌだ」と威張れるようになった。現在はアイヌとして積極的に生きて行くしかないと考えているという。

このような事例をふまえると、差別の体験は小中学校を中心とした子ども時代のほうが色濃く、大人になるにつれて耐性ができるとともに、気にならないレベルに変化していく場合もあるといえる。ここには、かつてよりあからさまなアイヌ差別が減ってきているという時代の効果も関係していよう。

第５節　まとめ

本章では和人からのアイヌへの差別の実態をいくつかの視点から検討してきた。

その結果明らかになったのは、以下の四点にまとめられる。

第一に、ライフコース上で差別が起きやすいのは、一つ目に学校生活の場、二つ目に結婚に際して、三つ目に就職の際や職場が挙げられる。この中でも、小中学校でのいじめは多くの人々に普遍的な経験となっている。その際、むかわ町と札幌市の違いとして、前者では地域にアイヌ集落があるため、かつてはアイヌ対和人という集団対集団の対立があったのが特徴的であった。また現在でも、いじめに用いられる言葉は上の世代から生活に根付いていることもあり、語彙が豊富である。一方、後者の札幌市では、和人に対してアイヌが圧倒的に少数派となるため、かえっていじめのターゲットになりやすい側面がある。さらに、授業でアイヌのことを学習したがゆえに、アイヌの子どもへのいじめが起きてしまうという状況もうかがえた。

第二に、差別には男女によって異なる様相がみられた。アイヌの男性よりも、女性にとって体毛が濃いという民族的特徴は切実な悩みであり、いじめの要因になりやすい。結婚を考えた時に、アイヌの女性側が体毛をコンプレックスに男性に臆病になってしまうという様子もうかがえた。一方、アイヌの男性のうち、アイヌ女性ではなく和人と結婚したいという結婚観をもつ人も存在した。こうした結果をふまえると、アイヌ女性であることは、和人からもアイヌ男性からも差別的なまなざしを向けられる可能性がある。つまり、性差を軸にした場合、アイヌ男性よりもアイヌ女性のほうがより低い位置に追いやられてしまう可能性は否めない。

第三に、アイヌ差別の中でも、アイヌと朝鮮人とのハーフの場合は、「朝鮮アイヌ」として純粋なアイヌ以上の差別を被ってきたという実態がある。ここには、第二で述べたように、かつてアイヌの女性は日本人との結婚にハードルがあり、朝鮮人と結婚することが多くあったという背景も関係している。こうした混血やアイヌの血の濃さを気にする様子は、アイヌ同士の結婚を避け、和人との結婚によって血を薄めていくという結婚の傾向からもうかがい知ることができよう。

第四に、人生で被ってきた差別の経験や、それによって培われた差別観は世代によって違いがあることが明らかとなった。概して、現在 20 ～ 30 代の若い世代では、昔は差別があったと耳にすることはあっても、実際に自分にはあまり経験がないため、アイヌ差別を気にしない傾向にある。むしろアイヌである自分を誇りに思っているケースも印象的であった。翻って、60 代以上の世代は、和人からのアイヌ差別が一般に流布していた時代を生きてきた。そのため、差別の経験がトラウマとなって残っているケースもあった。そして最後に、こうしたアイヌ差別を受けてきた子どもの世代、40 ～ 50 代では、学校生活や結婚の際に差別的な経験を受けた人もある程度存在している。親世代からアイヌであることの告知を受けないで育った人も目立った。それゆえこの中間の世代は、アイヌ差別で苦労してきた上の世代から、アイヌ文化を十分に継承されないできた人も少なくない。

このように、アイヌの中で世代が移り変わり、現在では差別経験をふまえ、アイヌであることに対してマイナス・イメージを持ちがちな上の世代から、アイヌ民族としての血を誇りに思う若い世代が現れるようにもなっている。そしてその中間でアイヌに対してマイナス・イメージを持つ世代からアイヌ文化を継承されてこなかった世代が存在し、さらに和人として、アイヌを家族に持ち、アイヌのそばで生きる人々も数多く存在している。多様な背景と考え方を持つ世代が交錯する現代ではあるものの、アイヌの人々やその周辺にいる人々が意識的にその文化を継承していかなければ、アイヌの知識は、アイヌの中でも徐々に薄れていってしまう。そしてその結果、アイヌのことを知らないがゆえに、アイヌへの差別も起こらないという状況が今後導かれていくかもしれない。

しかし、そうした現状を維持しながら、アイヌへの差別が忘れ去られていくままでいいのかどうかについては、改めて議論する余地がある。アイヌの歴史や知識を得た上で、今一度、和人からのアイヌ差別の過去を、和人もアイヌもともに学ぶ機会が検討されてもいいのではないだろうか。

注

1）民族内差別について詳しくは第８章を参照されたい。

参考文献

小笠原信之 , 2004,『アイヌ差別問題読本』緑風出版.

小内透 , 2009,「問題意識と調査の概要」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その１　現代アイヌの生活と意識――2008 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター , 1-6.

（菊地千夏）